

内的作業モデルが幸福感に及ぼす影響 —内的作業モデル間の交互作用に注目して—¹⁾

嶺 哲也*・大久保純一郎**

The Influence of Internal Working Models on Happiness:
Focusing on Interactions between Secure, Ambivalent and Avoidance

Tetsuya MINE* and Junichiro OKUBO**

The purpose of this research was to examine the influence of internal working model on subjective well-being and interdependent happiness and the interactions between internal working models (consisted in secure, ambivalent, and avoidance). Two hundred ten undergraduates completed measures of Internal Working Model Scale (secure, ambivalent, and avoidance subscales), Subjective Well-Being Scale and Interdependent Happiness Scale. The results of hierarchical multiple regression indicated the interactions of secure, ambivalent and avoidance on subjective well-being. Furthermore, it indicated that interaction of ambivalent and avoidance on interdependent happiness. The result indicated that was shown that balance of each pattern of internal working model (secure, ambivalent and avoidance) affect to happiness. Results suggested the importance of examining the influence of interaction between secure, ambivalent, and avoidance on psychological health.

key words: internal working models, adult attachment, subjective well-being, interdependent happiness

問題と目的

世界保健機関 (WHO) 憲章では、健康とは、疾病や障害のない状態ではなく、身体的、精神的、社会的に完全に調和のとれた良い状態 (Well-Being) であるといわれており、対人関係が幸福感に影響を及ぼすことは多くの研究において報告されてきた (e.g.

Hartup & Stevens 1997 ; Dush & Amato, 2005)。この Well-being に関連する心理的要因として、Bowlby (1969, 1973, 1980) が提唱した、自己や他者に関する認知的枠組みである内的作業モデルが関連していると考えられる。

内的作業モデル

Bowlby (1969, 1973, 1980) は愛着理論の中で、

¹⁾ 本研究は、平成 27 年度大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科卒業論文の一部を修正したものである。本研究の一部は、日本発達心理学会第 28 回大会において発表された。

* 大阪国際大学学生総合支援部学生相談室

Student Counselling Office, Office of General Support Department for Student, Osaka International University, 6-21-57 Tohdacho, Moriguchi-shi, Osaka 570-8555, Japan

** 帝塚山大学心理学部

Department of Psychology, Tezukayama University, 3-1-2 Gakuen-Minami, Nara-shi, Nara 631-8585, Japan

愛着に関する表象モデルとして内的作業モデル (Internal Working Models: IWM) の概念を提唱している。IWM とは、幼少期における養育者との愛着関係により形成される自己および他者についての認知的枠組みであり、個人内に内在化された IWM に合うように現実の出来事を解釈し更なる関係性を導いていくことから、早期のアタッチメント経験を基盤とする IWM の構築が、その後の人生に極めて重要な意味を持つと考えられている。IWM は“自分は他者に愛され援助される価値のある存在なのかどうか”という自己に関するモデルと、“他者は自分を愛し援助してくれる存在なのかどうか”という他者に関するモデルから成る。このモデルにより人は愛着対象の行動を予測し、自己の行動プランを作成する。この IWM により組織化された、認知、感情を含む行動パターンを愛着スタイルという (戸田, 2013)。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) はストレンジ・シチュエーション法を用いて乳児の愛着パターンを安定型、アンビバレント型、回避型の 3 タイプに分類した。そして、Hazan & Shaver (1987) は Ainsworth, et al. (1978) による 3 分類を参考に、成人の愛着スタイルを測定する自己報告式質問紙尺度を開発した。安定型は、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在という表象を持つという、安定したモデルを有するタイプであり、アンビバレント型は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象を持ち自己不全感が強いという不安定なモデルを有するタイプであるとされる。回避型は、他者に対して拒否的で援助を期待できないことから、これを補完するためにきわめて自己充足的な存在という自己に関する表象を持つという、回避的かつ自己充足的なモデルを有するタイプである。愛着スタイルの違いは、IWM を介在して、個人の社会的側面に影響を及ぼすと考えられている。この自己報告式の愛着スタイルは IWM を反映するとされる。

愛着スタイルは愛着行動パターンであり、それらの行動を生み出す観察不可能な IWM とは異なる概念であるが、本研究においては Fraley & Shaver (1988) と同様に、愛着スタイルと IWM を互換可能な用語として用いる。

IWM と対人関係に関する研究はこれまで多く行われてきており、友人関係における適応性 (金政, 2007) や、社会的適応性 (金政・大坊, 2003)、表情

認知 (金政, 2005a)、恋愛関係における対人認知 (岡島・桂田, 2012) など、様々な要因との関連が認められている。

IWM と幸福感

人間関係の満足は幸福感を予測することが知られている。Hartup & Stevens (1997) によれば、友人は自尊心や Well-being を促進する認知的・感情的な資源であり、年齢段階に応じた発達課題の達成を助けるものであるとされている。前述のように、人間関係が幸福感に及ぼす効果は様々な研究によりあげられているが、主要な要因の一つは、ソーシャル・サポートの獲得である。

森田 (2003) では、ソーシャル・サポートと主観的幸福感との関連が示されており、金政 (2005b) の研究では、安定型の愛着傾向をもつ者はストレスを受けた際に他者にサポートを求めやすい傾向にある一方で、不安定型の愛着傾向を持つ者は、ストレスを受けた際に人間関係を拒絶しサポートを求めない傾向があることが示されている。そして渡邊 (2011) は、IWM と主観的幸福感との間に有意な関連があることを報告している。これらの結果から、安定型の人はサポートを求めやすく幸福感が高く、それとは対照的にアンビバレント型の人はサポートを求めず幸福感が低いことが想定される。また、Wei, Liao, Ku, & Shaffer (2011) は、アタッチメント不安はセルフ・コンパッションを媒介し、アタッチメント回避は他者への情動的共感性を媒介して主観的幸福感に影響を及ぼすことを報告している。

しかし、従来の IWM 研究では、抑うつや不安といった人間のネガティブな側面に注目されてきており (e.g. 山崎・村松, 2014; 大井, 2007)、幸福感といったポジティブな側面は軽視されてきた。このため、IWM と幸福感に関する知見を蓄積する必要がある。

ところで、北米の人々の幸福の概念は「個人的な成功」を主とした意味合いが強いが、日本における幸福の概念は「対人関係の調和」を主とした意味合いが強いということが報告されている (内田・荻原, 2012)。欧米諸国で開発され、国内の幸福感研究で多く用いられる主観的幸福感を測定する尺度 (e.g. 伊藤・相良・池田・川浦, 2003; 島井・大竹・宇津木・池見・Lyubomirsky, 2004) は、その項目の多くが個人の達成などに関するものであるが、内田・荻原

(2012)が報告したような「対人関係の調和」などに関する項目は含まれていない。そして近年、Hitokoto & Uchida (2015)により「他者との協調性と他者との幸福」などに焦点を置いた協調的幸福感尺度が開発されており、IWMは自己や他者に関する認知的枠組みであることから、協調的幸福感に影響を及ぼしている可能性がある。

中尾・加藤(2003)の研究結果では、安定型とアンビバレント型は自己観(自己に関するIWM)に、回避型は他者観(他者に関するIWM)に対応することが示唆されているほか、内田・遠藤・柴内(2012)により、身近な人間関係におけるつきあいの質への評価が人生満足感や身体健康へ影響を及ぼすことを示されている。このことから、安定型は自己観と他者観がともにポジティブであり自尊心が高く他者を信頼することができるため、身近な対人関係をポジティブに評価し協調的幸福感が高いことが考えられる。アンビバレント型はその自己観の低さから協調的な関係を築くことができていると評価できないために協調的幸福感が低いと考えられ、回避型は他者観がネガティブであることから、他者との関わりを回避し協調的な対人関係を築かないため協調的幸福感が低いと考えられる。

これらのことから、IWMと幸福感との関連を検討するには、幸福感研究で多く用いられる主観的幸福感だけではなく、他者との関わりから獲得される協調的幸福感との関連も検討する必要があると考えられた。

特性論から見たIWM

Collins & Read(1990)は、Hazan & Shaver(1978)が安定型、アンビバレント型、回避型の特徴が記された文章の中から1つを強制的に選択させるため、個人内に1つしか存在しないという前提にあることを指摘した。そして、安定型、アンビバレント型、回避型の3つのパターンは特性としてそれぞれ個人に内在しており、個人にとって優勢な特性が表出されるという特性論を展開した。戸田(1988)は、この特性論の立場から、Hazan & Shaver(1988)を参考に安定型、アンビバレント型、回避型それぞれの得点を求める尺度を作成した。これ以降、国内においてもこの特性論に基づいたIWM研究が盛んに行われてきた。粕谷・菅原(2001)による中学生を対象とした学校適応に関する研究では、3分類モデルにおける安

定型、アンビバレント型、回避型それぞれの平均値をもとに被験者を8タイプに分類し、それらと学校適応との関連が検討された。その結果、安定型が他のIWMよりも優勢であることが、集団内における他者から承認されることや承認されていると認知することに関連していることが示された。また、8タイプの中で安定型得点が低くアンビバレント型と回避型の得点が高いタイプが、最も学校内で不適応を起こす傾向があることが示された。これらの研究結果から、個人の中に存在するIWMの中で優勢なものが表出されるのではなく、個人内のIWMのバランスにより心理的・精神的が規定されるという可能性や、IWM間に交互作用が生じている可能性が示唆される。しかしこの研究以外においては、特性論に基づくIWM尺度を用いているものの、個人内に存在するIWMのバランスや交互作用が心理的健康へ及ぼす影響について言及した研究は数が少ないため、これらについての知見を蓄積する必要がある。本研究においては特性論の立場に基づきIWMを捉えるため、安定型、アンビバレント型、回避型ではなく、安定、アンビバレント、回避として取り扱う。

本研究の目的

以上のことから、“安定は主観的幸福感・協調的幸福感を高め、アンビバレントおよび回避は主観的幸福感・協調的幸福感を低下させる”を第1の仮説とし、第2の仮説として、“IWMの3つの特性は幸福感に対して交互作用効果を及ぼしている”を設定した。本研究ではこの2点の仮説について検証することを目的とした。

青年期のIWMのバランスや交互作用が幸福感へ及ぼす影響を明らかにすることにより、環境への適応や対人関係の問題といった多くのストレスを抱える大学生の心理的健康へのアプローチの一助となるといえる。

方 法

調査手続き

大学の講義時間に個別記入形式の質問紙調査を実施した。回答は無記名で行われた。

調査時期

2015年9月、2016年7月に実施した。

調査対象者

関西圏の大学に所属する大学生210名に対して調

査を行い、そのうち回答に欠損がなかった190名(男性73名, 女性117名, 平均年齢 = 20.02, $SD = 1.04$)を分析の対象とした。

調査内容

質問紙は、調査対象者のデモグラフィック・データ(年齢, 性別)記入欄を設けたフェイスシートと以下の尺度から構成されていた。

主観的幸福感 伊藤・相良・池田・川浦(2003)により開発された主観的幸福感尺度を用いた。この尺度はWHOにより開発された心の健康自己評価質問紙 Subjective Well-being Inventory: SUBI (Sell & Nagpal, 1992; 大野・吉村・山内・百瀬・水島・浅井, 1995)を簡便化したものであり、心理的健康度の個人差を測定する尺度である。「あなたは人生が面白いと思いますか」等の12項目について4件法で尋ねた。

協調的幸福感 Hitokoto & Uchida (2015)により開発された協調的幸福感尺度を用いた。本尺度は、日本の幸福のとらえかた(内田・萩原, 2012)に基づいて作成されたものであり、「他者との協調性と他者との幸福」、「人並み感」、「平穏な感情状態」に焦点を置いた協調的な幸福感を測定する尺度である。日本においても高い値が確認されており、日本のみならず、北米、ドイツ、韓国などの他国においても十分な妥当性が確認されている。「大切な人を幸せにしていると思う」等の9項目について5件法で尋ねた。

内的作業モデル 戸田(1988)により開発された愛着スタイル尺度を用いた。本尺度は、詫摩・戸田(1988)により開発された成人のIWMの質を評価する尺度を戸田(1988)が改訂したものであり、安定型、アンビバレント型、回避型を測定する。本尺度ではこれらの3つのパターンを特性としてとらえ、各特性の個人内での相対比較によってIWMの個人差を測定するよう構成されている。安定型は「気軽に頼ったり頼られたりすることができる」、アンビバレント型は「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」、回避型は「人に頼るのは好きではない」等の項目から構成され、これらを含む計18項目について6件法で尋ねた。

結 果

各尺度の項目分析・得点化および信頼性の検討

はじめに、主観的幸福感尺度12項目、協調的幸福感尺度9項目、内的作業モデル18項目に対して項目分析を行った結果、全ての項目に天井効果および床効果は見られなかった。

主観的幸福感尺度12項目、協調的幸福感尺度9項目について、逆転項目を処理し、それぞれの合算平均得点と信頼性の推定値として α 係数を求めた。主観的幸福感は $M = 2.66$, $SD = 0.44$, $\alpha = .837$, 協調的幸福感は $M = 3.34$, $SD = 0.65$, $\alpha = .848$ であり、全ての尺度において十分な信頼性が認められた。次に、内的作業モデル尺度18項目について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果(Table 1)、全ての項目が戸田(1988)と同様に3因子に分かれ、原尺度と同様の因子構造が確認された。各下位尺度について逆転項目を処理し、それぞれの合算平均得点と信頼性の推定値として α 係数を求めた。安定は $M = 3.48$, $SD = 1.04$, $\alpha = .893$, アンビバレントは $M = 3.48$, $SD = 0.99$, $\alpha = .811$, 回避は $M = 3.20$, $SD = 0.91$, $\alpha = .756$ であり、全ての尺度において十分な信頼性が認められた。

本研究では、2015年9月と2016年7月に調査を行った。その内、分析の対象となったのは、2015年9月=103名、2016年7月=87名であった。調査時期により尺度の得点に統計的に有意な差が見られるかについて検討するため t 検定を行ったところ、全ての尺度において有意な差は見られなかった(主観的幸福感: $t(188) = 1.24$, *n.s.*, 協調的幸福感: $t(188) = 1.40$, *n.s.*, 安定: $t(188) = 1.48$, *n.s.*, アンビバレント: $t(188) = 0.42$, *n.s.*, 回避: $t(188) = 0.41$, *n.s.*)。

IWMと主観的幸福感・協調的幸福感の関連

IWMと主観的幸福感および協調的幸福感との関連を検討するため、相関分析を行った(Table 2)。分析の結果、安定は主観的幸福感($r = .485$, $p < .001$)、協調的幸福感($r = .477$, $p < .001$)との間に有意な正の相関が、アンビバレントは主観的幸福感($r = -.448$, $p < .001$)、協調的幸福感($r = -.441$, $p < .001$)との間に有意な負の相関が示された。回避は主観的幸福感($r = -.246$, $p < .001$)、協調的幸福感($r = -.315$, $p < .01$)との間に有意な負の相関が認め

Table 1 愛着スタイル尺度の因子分析

項目	I. 安定	II. アンビバレント	III. 回避	共通性
私はすぐに人と親しくなるほうだ	.886	.146	-.028	.741
私は知り合いができやすいほうだ	.818	.200	-.127	.665
はじめてあった人とでもうまくやっつけける自信がある	.775	.113	.028	.556
私は人に好かれやすい性質だと思う	.761	-.154	.061	.652
たいていの人は私のことを好いてくれていると思う	.727	-.219	.074	.647
気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.613	-.139	-.045	.460
時々友達が、私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になる	.094	.834	-.004	.658
人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	.098	.785	-.049	.573
私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう	.071	.608	.011	.352
自分を信用できないことがよくある	-.074	.596	.150	.443
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう	-.062	.549	-.020	.322
あまり自分に自信が持てない方だ	-.266	.399	-.081	.278
あまり人と親しくなるのは好きではない	-.036	-.010	.863	.756
私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやっつけけると思う	.331	-.011	.618	.406
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	-.099	-.103	.576	.350
人に頼るのは好きではない	-.033	-.001	.563	.325
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	-.045	.070	.485	.264
人は全面的には信用できないと思う	-.175	.254	.428	.372
因子間相関	I -			
	II -.290	-		
	III -.208	.171	-	

Table 2 IWM と幸福感の相関分析

	安定	アンビバレント	回避
主観的幸福感	.485***	-.448***	-.246***
協調的幸福感	.477***	-.441***	-.315**

** $p < .01$, *** $p < .001$

られた。

IWM による主観的幸福感・協調的幸福感への影響

IWM による幸福感への影響および幸福感に対する IWM の交互作用を検討するために階層的重回帰分析を行った (Table 3)。多重共線性を回避するため、安定、アンビバレント、回避は平均値を 0 に中心化した値を用いた。

はじめに、主観的幸福感を従属変数とした分析を行った。性別と年齢による影響を統制するためこれらを step 1 に投入し、step 2 には各 IWM を、step 3 には各 IWM の 2 要因の交互作用項を、step 4 には各 IWM の 3 要因の交互作用項を投入した。

分析の結果、まず step 1 の性別と年齢による影響はみられず (性別: $\beta = -.073$, *n.s.*, 年齢: $\beta =$

.000, *n.s.*), step 2 では、安定による有意な正の影響 ($\beta = .381$, $p < .001$), アンビバレントによる有意な負の影響 ($\beta = -.323$, $p < .001$), 回避による有意傾向な負の影響 ($\beta = -.105$, $p < .10$) が認められた。step 3 では、分散説明率の増分が有意ではないため各 IWM 間の 2 要因の交互作用は全て認められなかった。しかし、step 4 においては分散説明率の増分が有意であり ($\Delta R^2 = .017$, $p < .05$), 3 要因の交互作用項が有意であった ($b = .054$, $bSE = .024$, $p < .05$)。そこで、3 要因の交互作用項について単純傾斜の検定を行った結果 (Figure 1), 安定高群 (+1SD) では、回避の高低 ($\pm 1SD$) どちらにおいてもアンビバレントの高低による有意な影響は見られなかった (回避+1SD: $b = -.121$, $bSE = .150$, *n.s.*, 回避-1SD: $b = -.150$, $bSE = .144$, *n.s.*)。一方で、安定低群 (-SD) においては、回避が高い (+1SD) 場合のみ、アンビバレントの高低による有意な影響が示された (回避+1SD: $b = -.372$, $bSE = .150$, $p < .05$, 回避-1SD: $b = -.079$, $bSE = .164$, *n.s.*)。この結果から、安定が低く回避とアンビバレントが

Table 3 IWMによる幸福感への影響

	主観的幸福感					協調的幸福感				
	<i>b</i>	<i>bSE</i>	β	R^2	ΔR^2	<i>b</i>	<i>bSE</i>	β	R^2	ΔR^2
step 1				.005	.005				.009	.009
性別	-.067	.067	-.073			.116	.098	.086		
年齢	.000	.032	.000			-.019	.046	-.029		
step 2				.358***	.353***				.381***	.373***
安定	.162	.027	.381***			.230	.039	.368***		
アンビバレント	-.145	.028	-.323***			-.213	.040	-.323***		
回避	-.051	.030	-.105†			-.117	.043	-.163**		
step 3				.372***	.013				.421***	.040*
安定×アンビバレント	-.005	.022	-.014			.006	.032	.012		
安定×回避	.014	.027	.031			-.024	.038	-.037		
アンビバレント×回避	-.047†	.027	-.110			-.130**	.037	-.207		
step 4				.389***	.017*				.425***	.003
安定×回避×アンビバレント	.054*	.024	.139			.034	.034	.061		

†*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

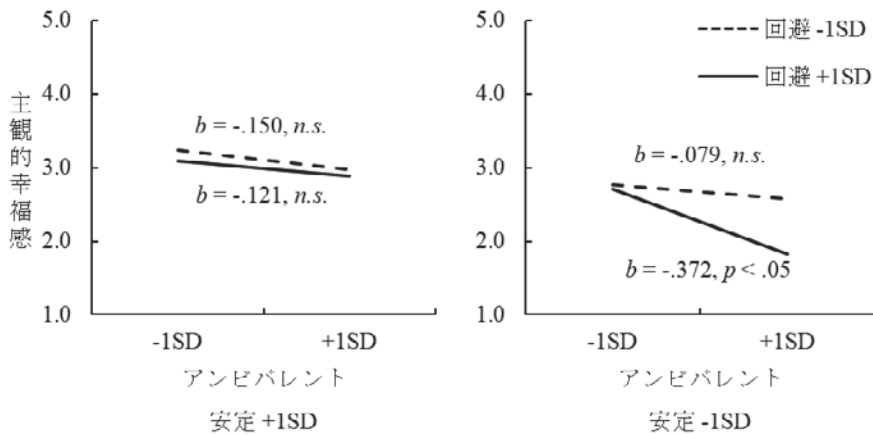


Figure 1 主観的幸福感に対する安定、アンビバレント、回避の交互作用

高い場合に主観的幸福感が低いことが認められた。

次に、協調的幸福感を従属変数とし、step 1 に性別と年齢、step 2 に各 IWM を、step 3 に IWM の 2 要因の交互作用項を、step 4 には IWM の 3 要因の交互作用項を投入し階層的重回帰分析を行った。

分析の結果、step 1 では性別と年齢による影響は見られず(性別： $\beta = .086$, *n.s.*、年齢： $\beta = -.029$, *n.s.*)、step 2 では安定による有意な正の影響 ($\beta = .368$, *p* < .001)、アンビバレントと回避による有意な負の影響(アンビバレント： $\beta = -.323$, *p* < .001、回避： $\beta = -.163$, *p* < .01)が示された。step 3 では、

分散説明率の増分が有意であり ($\Delta R^2 = .040$, *p* < .05)、アンビバレント×回避の交互作用項が有意であった($b = -.130$, *bSE* = .037, *p* < .01)。そこで、単純傾斜の検定を行った結果 (Figure 2)、回避が高い場合 (+1SD) においてアンビバレントの高低による影響が有意であり、回避が低い場合 (-1SD) においてはアンビバレントの高低による有意な影響は認められなかった (回避+1SD： $b = -.308$, *bSE* = .050, *p* < .001、回避-1SD： $b = -.068$, *bSE* = .056, *n.s.*)。この結果から、回避とアンビバレントが高い場合に協調的幸福感が低いことが示された。

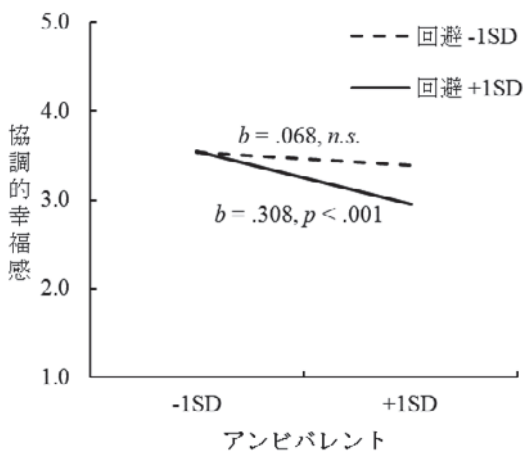


Figure 2 協調的幸福感に対するアンビバレントと回避の交互作用

考 察

本研究では、IWMと主観的幸福感・協調的幸福感との関連およびIWM間の交互作用について検討を行った。

IWMと幸福感との相関

はじめに、各IWMと幸福感との関連を検討するために相関分析を行った。その結果、各IWMと主観的幸福感および協調的幸福感との間に有意な関連が認められた。これらの結果は、安定的な愛着スタイルは心理的健康と正の関連があり、不安定的および回避的な愛着スタイルは心理的健康と負の関連があるという従来の研究 (e.g. 山崎・村松, 2014; 大井, 2007) と同様の結果であったといえる。

IWMによる幸福感への影響

各IWMによる幸福感への影響およびIWM間における交互作用について検討するため、階層的重回帰分析を行った。その結果、主観的幸福感に対する安定とアンビバレントによる有意な効果および回避による有意傾向な主効果が認められ、協調的幸福感に対する安定、アンビバレント、回避それぞれによる有意な主効果が示された。この結果から第1の仮説は支持された。これまでのIWM研究において、安定的な愛着スタイルは心理的健康を高め、不安定的な愛着スタイルと回避的な愛着スタイルは心理的健康を損なうことが示されている (e.g. 山崎・村松, 2014) ことから、この結果はそれらの知見と一致しているといえるだろう。また、回避による主観的幸福感への

影響は有意傾向である一方で協調的幸福感に対しては有意な影響を示し、協調的幸福感に対する影響の方がやや強いという結果が示された。本研究で用いた愛着スタイル尺度 (戸田, 1988) における回避型の得点は、他者に関するIWMである他者観に対応している (中尾・加藤, 2003) ほか、回避型は他者に援助を期待せず他者との関わりを避けようとするという特徴を持っているため、回避型の特性を強く持つ者は、他者に対してネガティブな表象を抱き親密な関係を築こうとせず、他者との協調的な関わりが少ないため、このような結果が得られたと考えられる。

IWMによる幸福感への交互作用

階層的重回帰分析の結果、主観的幸福感を従属変数とした場合においては安定×アンビバレント×回避の交互作用項が、協調的幸福感を従属変数とした場合においてはアンビバレント×回避の交互作用項が有意であったことから、第2の仮説は一部支持された。

主観的幸福感に対する安定×アンビバレント×回避の交互作用について単純傾斜の検定を行った結果、安定が低く回避が高い場合においてのみアンビバレントによる主観的幸福感への有意な効果が認められ、安定が低く回避とアンビバレントが高いと主観的幸福感が低いことが示された。戸田 (1988) が開発した尺度におけるアンビバレント型得点は自己に関するIWMである自己観と、安定型得点と回避型得点は他者に関するIWMである他者観に対応することが示唆されており (中尾・加藤, 2003)。また、不安定な愛着傾向を持つものはソーシャル・サポートを求めることができないことが示されている (金政, 2005)。これらの知見から、安定が低くアンビバレントと回避が高い状態、つまり自己観と他者観がともにネガティブであることにより、自尊心が低く、また他者を信頼することが困難でありソーシャル・サポートを求めることができないため、主観的幸福感が低下すると考えられる。しかしながら、安定が高い場合には、アンビバレントと回避が高くとも主観的幸福感が低下しないことが示された。したがって、安定が高いほどアンビバレントと回避の交互作用が見られない可能性や、安定が低くアンビバレントと回避が高い状態でない限りは主観的幸福感が低下しないという可能性が示唆された。この結果は、粕谷・菅原 (2001) による、IWMの3パターンそれぞれの

高さによる8タイプの組み合わせの内、安定型得点が低くアンビバレント型と回避型得点が高いタイプが最も学校内で不適応を起こす傾向があるという研究結果と同様の結果が得られ、IWMの特性論的立場を支持する結果が得られたといえる。

次に、協調的幸福感に対するアンビバレント×回避の交互作用について単純傾斜の検定を行った結果、回避が高い場合にアンビバレントによる協調的幸福感への有意な効果が認められ、回避とアンビバレントが高い場合に協調的幸福感が低下することが示された。これは、前述のようにアンビバレント型は自己観に、回避型は他者観に対応することが示唆されている(中尾・加藤, 2003)ことから、自己と他者にネガティブな表象を抱く者は、対人関係における自信が低く他者との親密な関係を求めようとしないため、協調的幸福感が低下すると考えられる。

主観的幸福感に対する安定×アンビバレント×回避という3要因の交互作用が見られた一方で、協調的幸福感に対してはアンビバレント×回避の2要因の交互作用が認められた。この結果についてはTable 2, 3と中尾・加藤(2003)の結果を基に考察したい。Table 2, 3を見ると、回避は主観的幸福感よりも協調的幸福感との関連の方がやや強いことが分かる。また、回避型は他者観に対応しており、アンビバレント型は自己観に対応する(中尾・加藤, 2003)ことから、アンビバレントと回避の得点が高い者は自己観・他者観がネガティブであるため、他者に見捨てられないかという不安を持ち、さらに他者を信頼することができず親密な関係を築くことが困難であるため、他者との協調的な関わりから獲得される協調的幸福感への交互作用が強く作用し、これに対する安定による抑制が働かないために、アンビバレント×回避の2要因の交互作用が示されたのではないだろうか。

主観的幸福感に対しては安定、アンビバレント、回避による交互作用が、協調的幸福感に対してはアンビバレント、回避による交互作用が認められたが、その説明率は低いものであった。Collins & Read(1990)は愛着タイプについての特性論を展開しているが、安定型、アンビバレント型、回避型それぞれのタイプが特性として個人内に内在しており、その中で優勢なタイプが表出するとしている。このため低い説明率が示されたと考えられる。しかしながら、粕

谷・菅原(2001)の研究結果と同様に、安定、アンビバレント、回避の得点のバランスにより個人の心理的健康に影響を及ぼす可能性が示唆された。これらの結果は、3つのタイプの内優勢な1つが表出されるというCollins & Read(1990)の主張とは異なるものである。これは、優勢な愛着パターンが行動として表出されるものの、表出されなかった愛着パターンが個人の心理的健康に影響を及ぼすという可能性を示唆している。この点については、今後の研究でいかなる場合に交互作用が生じるかについて知見を蓄積する必要があるだろう。

本研究では、これまで検討されてこなかった主観的幸福感、協調的幸福感とIWMとの関連およびIWM間の交互作用効果についての検討を行った。分析の結果から、各IWMは主観的幸福感と協調的幸福感に対して異なる交互作用効果を及ぼしており、主観的幸福感においては安定、アンビバレント、回避の交互作用が認められ、安定が低くアンビバレントと回避が高い場合に主観的幸福感が低下することが示された。協調的幸福感においてはアンビバレントと回避の交互作用が認められ、アンビバレントと回避がともに高いと協調的幸福感が低下することが示された。これらの結果から、IWMのそれぞれのパターンの強さによって幸福感が規定されるといえ、特性論的観点からIWMが心理的健康へ及ぼす影響を検討することや、IWM間の交互作用効果を検討することの重要性が示された。

本研究の結果から、アンビバレントや回避の特性が高くとも、安定の特性を高めることができれば心理的健康が高まる可能性が示された。この結果から、IWMの問題により心理的健康が損なわれている者に対する効果的なアプローチの確立に寄与するといえる。

本研究の問題点がいくつか挙げられる。一点目は横断的研究であることから厳密な因果関係を検討することができていないことである。二点目はAinsworth et al.(1978)による3カテゴリーモデルを用いたことにより個人のIWMをより正確に測定できていない可能性が挙げられる。今後は縦断研究による厳密な因果関係を特定する必要や、より洗練された2次元4カテゴリーモデルに基づく尺度を用い再検討する必要があるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A Psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. 1969 Attachment. *Attachment and loss*. vol.1. New York: basic Books.
- Bowlby, J. 1973 Separation: Anxiety and anger. *Attachment and loss*. vol.2. New York: basic Books.
- Bowlby, J. 1980 Loss, Sadness and Depression. *Attachment and loss*. vol.3. New York: basic Books.
- Cacioppo, J. T., Hawskley, L. C., & Bernston, G. G. 2003 The anatomy of loneliness. *Current Directions in Psychological Science*, **12**, 71-74.
- Collins, N. L., & Read, S. J. 1990 Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644-663.
- Dush, C. M. K., & Amato, R. P. 2005 Consequences of relationship status and quality for subjective well-being. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 607-627.
- Fraley, R. C., & Shaver, P. R. 1988 Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 350-365.
- Hartup, W. W., & Stevens, N. 1997 Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, **121**, 355-370.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualize as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. 2015 Interdepend happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, **16**, 211-239.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.
- 金政裕司 2005a 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響—成人の愛着的視点から— 心理学研究, **76**, 359-367.
- 金政祐司 2005b 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレス・コーピングとの関連—幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的—貫性についての検討 パーソナリティ研究, **14**, 1-16.
- 金政裕司 2007 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, **22**, 274-284.
- 金政裕司・大坊都夫 2003 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, **74**, 466-473.
- 粕谷貴志・菅原正和 2001 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, **11**, 137-145.
- 森下正康・三原まどか 2015 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響: 内的作業モデルと自己受容を媒介として 発達教育学研究: 京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期過程研究紀要, **9**, 31-42.
- 森田 薫 2003 青年期におけるソーシャル・サポートと主観的幸福感との関連—対象表象の視点を加えて— 九州大学心理学研究, **4**, 167-175.
- 中尾達馬・加藤和生 2003 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか 九州大学心理学研究, **4**, 57-66.
- 岡島泰三・桂田恵美子 2012 青年期におけるアタッチメントスタイルと対人認知: 交際期間の違う恋人の応答性の認知 人文論究, **62**, 55-67.
- 大野 裕・吉村公雄・山内慶太・百瀬知雄・水島広子・浅井昌弘 1995 心理的健康感と心理的不健康感の関係について—患者群と非患者群の比較— ストレス科学, **10**, 273-278.
- 大井京子 2004 内的作業モデルと不安・抑うつとの関連 東京家政大学臨床相談センター紀要, **4**, 17-29.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. 2000 Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *Psychologist*, **55**, 68-78.
- Sell, H., & Nagpal, R. 1992 *Assessment of subjective Well-being: The subjective well-being inventory (SUBI)*. New Delhi: Regional Office for South-East Asia, World Health Organization, .
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見 陽・Lyubomirsky, S. 2004 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌, **51**, 845-853.
- 詫摩武俊・戸田広二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度—成人愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 戸田広二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル—作業仮説 (working models) からの検討— 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, **27**.
- 戸田広二 2013 ボウルビイの愛着理論の貢献: 過去・現在・未来 田島信元・南 徹弘 (編) 発達心理学と隣接領域の理論・方法論 新曜社 pp.109-114.
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 2012 人間関係のスタイルと幸福感: つきあいの数と質からの検討 実験社会心理学研究, **1**, 63-75.

内田由紀子・萩原祐二 2012 文化的幸福観：文化心理学的知見と将来への展望 心理学評論, **55**, 26-42.

渡邊卓也 2011 自己愛人格と主観的幸福感との関連に及ぼす心的表象の影響 立命館人間科学研究, **22**, 19-27.

Wei, M., Liao, K., Ku, T., & Shaffer, P. A. 2011 Attachment, self-compassion, empathy, and subjective

well-being among college students and community adults. *Journal of Personality*, **79**, 191-221.

山崎理恵・村松公美子 2014 大学生における抑うつ傾向について—内的作業モデルの視点からの検討— 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, **7**, 55-62.

(受稿: 2018.11.23; 受理: 2018.12.28)
